

法政大学学術機関リポジトリ

HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

恋愛、植民地、小説：十九世紀イSPANアメリカ 恋愛小説

著者	柳原 孝敦
出版者	法政大学比較経済研究所
雑誌名	比較経済研究所ワーキングペーパー
巻	107
ページ	43-58
発行年	2002-03-15
URL	http://hdl.handle.net/10114/3913

恋愛、植民地、小説
十九世紀イスマノアメリカ恋愛小説
柳原孝敦（経済学部助教授）

1 前提：ポストコロニアル批評とイスマノアメリカ研究

いわゆるポストコロニアル批評がエドワード・サイード『オリエンタリズム』¹のインパクトに始まることに異論の余地はないだろう。それゆえ、当初この批評の動向は、主にヨーロッパ（人）の手によってなされた植民地表象の総体、つまり植民地言説（コロニアル・ディスコース）への批評を意味していた。しかし、植民地および植民地主義とそれを巡って生成する言説の問題は、ただ一方的に（旧）宗主国（ヨーロッパ）側から（旧）植民地を表象する際にのみ生まれるものであるはずもない。やがて（旧）植民地の側から（旧）宗主国を表象する契機も生まれるのだし、（旧）植民地の側から（旧）植民地内部を表象することもあるだろう。

そもそも、ヨーロッパによる植民地の表象そのものが、ただ植民地主義的なものだけを一元的・一枚岩的に露呈し、そのイデオロギーを強化することのみ与するものだと考えるのも、マニ教的に過ぎよう。ひとつの言説が生まれるには、それを生み出す接触や衝突があったのであろうし、その言説を作ってゆくテクストの一つ一つには、それらの衝突を刻み込み、揺らいでいるものもあるに違いない。当のサイード自身が後に行ったように²、植民地言説も「対位法的」に捉えられるべきものもあるだろうということだ。そしてまた、こうした多元的なテクストを生み出す場としての「接触領域」（メアリー・ルイズ・プラット）という概念は³、ないがしろにされるべきではない。

ところで、こういった「接触領域」における言説の生成を「対位法的」に記述・分析した研究は、もちろん、近年のイスマノアメリカ（スペイン語圏のラテンアメリカ諸国）研究にも見られる。たとえば林みどり『接触と領有』⁴は、まさにサイードとプラットを理論的出発点としながら、十九世紀アルゼンチンの知識人たちが紡ぎだしてゆく自己表象の中に、ヨーロッパのテクストや国内の辺境におけるマージナルな人々の言説を自己領有（appropriation）する様子を記述したり、ヨーロッパの旅行者がまさに植民地主義的というほかはない一言をテクストに書き付けるに際して、それを宙吊りにしてしまうような要素をも同時に書き込んでしまっていることを暴いたりして刺激的だ。イスマノアメリカ研究をポストコロニアル批評の視点から進めるに際して、この到達点は踏まえていなければならない。

さて、私はかつて、ポストコロニアル批評が植民地言説の批判に

始まるものであるならば、そういった流れは既に一九四〇年代のイスパノアメリカの、特に歴史研究と文化批評の分野において始まったのであり、その中心にメキシコの批評家アルフォンソ・レイエスがいたのだという趣旨の論文を書いた⁵。その後の私自身のスタンスは、必ずしもポストコロニアル批評の流れと一致しているわけではない。たとえば「ラテンアメリカ」という概念枠を形作る言説形成を記述したりしているのだが⁶、それでも、文学研究の立場から、個々のテクストの要求にしたがって、植民地主義との関係でそれを論じたこともある。その際に私が関心を抱いてきたのは、レトリックの形⁷と(間)テクスト性の問題⁸であった。この問題関心は、ここでも維持される。これらはいずれも言説形成にかかわる問題だからだ。

ヨーロッパが植民地とのかかわりの中で紡ぎだしてきた言説のひとつに恋愛がある。ここでは、恋愛というヨーロッパ発の言説を、独立後、19世紀のイスパノアメリカの文学がいかに取り込んできたかを分析する。

2 恋愛、植民地、小説

ここで言う恋愛とは、スタンダールが「情熱恋愛」と名づけたものである。ドニ・ド・ルージュモンによれば、それは、12世紀フランスで生まれたものであり、その後、主に文学作品がその形を整え(パターン化し)、強化していったものだ⁹。ルージュモンの立論のうち、アルビジョワ派や新プラントン主義といった思想的背景、トロバドゥールの功績といったものには、今は深く立ち入る必要もないし、これらの論点に対しては現在では反論も多いようであるから、取り敢えずひとまず措くことにする。私が注目したいのは、この頃形を取り始めた恋愛の物語が文学を通じて強化され、ひとつのパターンを形成してきたのだという事実である。

教会と結婚の制度に反し、成就することもなく、最終的に死をもって報われるというこの恋愛の物語は、後にスタンダールによって「情熱恋愛」と名づけられ、今も脈々とそのパターンを保持している。私がルージュモンの立場に立つのは、この名の当の名付け親であるスタンダールが、「情熱恋愛」を高度に文化的な一つの形式とみなしているからだ。しかもそれを非ヨーロッパ世界との対比で論じている。

周知のごとく、スタンダールの『恋愛論』は、彼がザルツブルクの岩にたとえて「結晶作用」と呼ぶものを、恋愛する人間の心性の中に分析している書である。「結晶作用」とは、出会いが恋愛へと変じていく過程に起こる精神の文節作用に他ならない。精神が何らかの感情に文節されるということは、それだけでそこに文化的な規制

がかかっているということであろう。そして何より、この結晶作用を論じながら、スタンダールは明言しているのだ。

私が敢えて結晶作用と呼ぶこの現象は、我々に快樂をもつことを命じて脳髄に血を送る本能と、愛するものの美点とともに快樂が増すという感情と、彼女は自分のものだという觀念とからくる。未開人は、この第一歩以上に進むゆとりがない。快樂は味わうが、脳髄の働きは、森の中で逃げる鹿を追うことにかかりきりで、その肉を食って、できるだけ早く力を回復しなければならない¹⁰。

スタンダールの「未開人」に対する認識のあまりの幼稚さに、今は驚く必要はない。重要なことは、彼が恋愛の「結晶作用」を「未開人」には理解不能な、きわめて文化的なものとしていることだ。この対比は、少し後にも確認される。「すべて合理的な政府は、二度とこんな結晶作用を与えることができない。アメリカ合衆国の政府ほど想像力に反する政府はない。私は、上に（第二章）彼らの隣人の未開人には、結晶というものがほとんど判るまいと述べておいた¹¹」作家の合衆国嫌悪が何に由来するのかは知らないが、とにかく、合衆国政府のごとき「合理的」政府は、「想像力」の産物である恋愛の結晶作用を知ることはいえぬ。これこそがわれわれ（ヨーロッパ人）の優位を保障するものである。ここで言う合衆国政府の「隣人の未開人」が合衆国内の「未開人」なのか、あるいは隣国の「未開人」なのか、この文章だけでは判断しかねるものの、いずれにしてもアメリカ／ヨーロッパの対比の中で恋愛は、スタンダールによって、こうしてヨーロッパ側の豊かな「想像力」の産物として規定される。

一方で、具体的な恋愛の物語の数々（恋愛小説）を歴史的に概観してみると、それが18世紀から19世紀にかけて、徐々に植民地と関係を結んでいったことがわかる。恋愛は教会と結婚の制度に対立するものであった。つまり、反社会的なものであった。反社会的なものであるために、恋人たちはあるいは逃亡を余儀なくされ、あるいは避難所を求める。管見の限り、アベ・プレヴォー『マノン・レスコー』（1731）がその嚆矢ではあるまいか。シュヴァリエル・ド・グリユとマノンは、当時フランス領だったヌーヴェル・オルレアン（ニュー・オーリンズ）に逃亡する。次いで、ルソー『ジュリー、または新エロイズ』（1761）では、ジュリーの結婚によって恋に破れたサン＝プルーが、世界を旅して回り、その際にアメリカ大陸にも立ち寄るであろう。そういった要素を取り入れるに際して、前者が地理的誤謬を犯していたり、後者が怪物を見たとの記述を盛

り込んだりしているという世界認識の歪みは、ここでは問わないでおこう。このルソーに大いに感化されたらしいベルナルダン・ド・サン=ピエール『ポールとヴィルジニー』(1788)に至って、恋愛小説の舞台が植民地へと移される。主人公はいずれもフランス人ではあるものの、フランス島(現モーリシャス)に住む若い男女が主人公なのである。さらに進んで1801年には、シャトーブリアン『アタラ』が出版され、フランス領ルイジアナの先住民の恋が描かれることになる。

このように、恋愛小説は徐々に植民地との関係を深めてゆくわけだが、植民地を舞台にした『ポールとヴィルジニー』の序文は、私の立場に照らして、非常に興味深い。

私はこの小著を著すについて大きな計画を立てました。私はそこに欧羅巴のそれとは異なった土地や植物を描こうと努めました。我が欧羅巴の詩人達はもうこれまで屢ば彼等の恋人達を小川の縁や、牧場の中や、ぶなの葉陰に憩わせました。私は彼等を海辺や、岩の根や、椰子やバナナや花盛りの檸檬の木陰に座らせてみようと思ひ立ちました。欧羅巴以外の土地で、少なくとも欧羅巴のそれに劣らない面白い恋の場面を見出すことができないのは、ただそこにテオクリトスやヴェルギリウスのような詩人が欠けているからです¹²。

ここに読まれるべきことは、まず、「テオクリトスやヴェルギリウスのような詩人」の欠如のためにヨーロッパ以外の土地に恋愛が存在しなかったという断言であろう。スタンダール同様、サン=ピエールもまた、恋愛をヨーロッパの優位を証明する高度に文化的なもののみなしている。その高度に文化的な何ものかであるものを、非ヨーロッパ世界に持ち込もうとするサン=ピエールの決意は、たとえばキリスト教伝道の使命を携えて植民地に渡った聖職者たちにもたとえられるだろう。

さらに注意すべきは、「我が欧羅巴の詩人達はもうこれまで屢ば彼等の恋人達を小川の縁や、牧場の中や、ぶなの葉陰に憩わせました」との観察であろう。つまり、恋愛は、しばしば印象的な風景とともに描かれるものである。それゆえ、異種のものであっても美しければ、「私は彼等を海辺や、岩の根や、椰子やバナナや花ざかりの檸檬の木陰に座らせてみようと思ひ立ちました」と移植が可能はずだ。おそらく、サン=ピエールの最大の功績は、この風景の転換の意図にあるだろう。

実際、恋愛は、極めて内面的な何ものかでありながら、風景とともに描かれる。後に述べるように、シャトーブリアンなども、その

風景描写によってイSPANアメリカの19世紀恋愛小説に多大な影響を与えたのだった。内面的な者こそが風景を見出すというのは、柄谷行人『日本近代文学の起源』の主張であった¹³。ヨーロッパで生まれた恋愛は、こうして、エグゾティックな風景を求めて、移動することになる。

風景の転換は、ただエグゾティックなものを求めるという習性にも依拠するのではない。続けてサン=ピエールは書く。

趣味の豊かな旅行者達が南の島々の魅力ある描写をわれわれに残していることを私は知っています。けれどもそれらの島々の住民達の風習や、とりわけその地へ渡る欧羅巴人達の風習は、屢ばその風景を害っています。私は熱帯の自然の美しさと、そこに生活する或る小さな社会の心の美しさとを結び合わせて見たいと思いました¹⁴。

美しい風景を、旅行記を通じて既にヨーロッパ人は知っている。しかし、現地の住民とヨーロッパ人との「風習」がその風景を損なっている。「風習」なるものも極めて文化的な何ものか、というよりも文化そのものであるわけだが、恋愛はこうして、文化の軋轢を生み出しながら作られなければならない何ものかであり、それによって風景を救い出すものなのである。風景（「自然の美しさ」）と内面（「心の美しさ」）は、同時に（「結び合わせて」）救われなければならない。かくして、そこに恋愛が必要となるのだし、それはヨーロッパが植民地に持ち込まなければならないものなのだ。

3 恋愛を取り込むこと：19世紀イSPANアメリカ小説の立ち上げ方

恋愛小説は、印象的な風景描写を伴いながら、徐々に植民地に移植される。その点で画期的な作品は、『ポールとヴィルジニー』よりもむしろ、シャトーブリアンの『アタラ』であっただろう。少なくとも、アメリカ大陸、あるいはイSPANアメリカにとっては。何しろそれは、19世紀の最初の年に書かれているし、アメリカ先住民を主人公としているのだから。

周知のごとく、イSPANアメリカの国々は多くが1810年から1825年の間に独立を達成する。独立期の立役者であったクリオーリョ（アメリカ大陸生まれの白人）たちは同時代のヨーロッパ知識人たちのテクストを取り込みながら自己表象を作り出してきた。その際の自己表象において重要な要素の一つが風景であった。やはり十九世紀初頭にアメリカ大陸の自然を描いたドイツの博物学者アレクサンダー・フォン・フンボルトのテクストは、多くのイSPAN

アメリカ独立期のクリオーリヨ知識人に取り込まれた¹⁵。そしてフンボルトに比肩しうるほど模倣され、取り込まれたのがシャトーブリアンであった。

『アタラ』は当時まだフランスの植民地であったルイジアナの先住民の恋愛を描いたものである。スペイン人に育てられたシャクタスが、敵対する部族の捕虜となり、その酋長の娘アタラと恋に落ち、逃避行を企てるものの、最後にアタラは死んでしまうという、典型的な恋愛小説のパターンを踏襲した小説だ。これが、風景描写の点でも印象的で、多くのイSPANアメリカの知識人にも読まれたというのだ。ドミニカ共和国の批評家ペドロ・エンリケス＝ウレーニャは、「アレクサンダー・フォン・フンボルトとシャトーブリアンの助けを得て、とうとうわれわれは自然を直に眺めることができるようになった¹⁶」と述べている。

そしてまた、恋愛が重要なのは、それが前節最後に述べたように、「風習」すなわち文化との軋轢のなかで人の内面を形作ってゆくものだからだ。ドリス・ソマーは、『創成のフィクション』において、ラテンアメリカ独立期の、国民の創成期に書かれた小説に共通する特徴として、風俗写生と恋愛小説の二点を挙げている¹⁷。これにピカレスク・ロマンという要素も加えても良からうとは思っているのだが、今はそのことは問題ではない。ともかく、こうして風俗・風習や風景と一緒にたになって、恋愛が語られたのが19世紀イSPANアメリカの創成期の小説だったということだ。

風俗写生(costumbrismo)というのは、18世紀終盤からスペイン語圏の文学に多く見られた傾向で、リアリズムの一サブジャンルとみなしてよいのだろうが、ある一地方、一時代の風俗・習慣、語法などを積極的に小説に取り込んでゆく技法だ。たとえば私がこれから扱おうとしているキューバのシリロ・ビリャベルデ『セシリア・バルデス』などは、1839年と1882年に、都合三つの版が存在するわけだが、そのうちのひとつは、「風俗写生の小説」を明言するものであり、完全版もその傾向をさらに強化したものである。ベルナルダン・ド・サン＝ピエールがいみじくも指摘したとおり、恋愛小説は「風習」にもかかわってくるものなのである。

風景といい風習といい、いずれもナショナリズムに深くかかわってくる要素である。このことも忘れてはならないだろう。19世紀独立以後のイSPANアメリカは、当然のことながらナショナリズムの創成期として捉えられるわけだけれども¹⁸、そしてそれは旧植民地であったところの必然的な時代の流れであるわけだけれども、恋愛という文化的概念は、この問題にもかかわってくるのである。

このように、19世紀においては切実な要請であったと言ってもいい恋愛小説は、各国で生産されることになる。主な例で言えば、

上述『セシリア・バルデス』以外にも、アルゼンチンのホセ・マルモル『アマリア』(1851)、チリのアルベルト・ブレスト・ガーナ『マルティン・リーバス』(1862)、そして最も人気を博し、その後も読み継がれることとなるコロンビアのホルヘ・イサークス『マリーア』(1867)などである。

以下に私は、『セシリア・バルデス』と『マリーア』を取り上げ、分析する。これらは先にあげた二つの問題関心、すなわち、レトリックの形と間テクスト性の観点に、それぞれ対応するものだからである。その際に、恋愛が風景、風習、ナショナリズムなどにかかわる文化的な産物だという視点は、常に保たれることになるだろう。

4 『セシリア・バルデス』¹⁹、あるいは「宿命の女」

キューバの作家シリロ・ピリャベルデ(1812-95)が1839年に発表した短編小説が最初の『セシリア・バルデス』であった。その後これは、もう少し長めの小説として出版されるが、ニュー・ヨークに亡命中の1882年に大幅に加筆され出版されたのが、現在完全版とされる『セシリア・バルデス』である。ムラータ(黒人と白人の混血の女性、男性はムラート)のセシリア・バルデスという名前の私生児の女性と、彼女の実の父親の息子、レオナルドという法学を学ぶ白人青年との恋物語を中心としながらも、ムラートや黒人奴隷などの風俗を取り入れ、1830年前後(小説の時代設定がその頃になっている)のキューバ社会を活写した、典型的な風俗写生小説でもある。そしてまた奴隷解放論者でもあった作家の思想を表出するための道具立ても数多く見られる。最初の短編では、セシリアが白人青年に誘惑され、姿を消すというストーリーであったのだが、完全版では、レオナルドがセシリアを愛人とし、別の女性と結婚してしまったために、怒ったセシリアの依頼で、彼女に想いを寄せるムラート、ホセ・ドロレスによってレオナルドが殺害されるというストーリーに変更されている。

恋愛は元来、反社会的なものであり、結婚制度に対立するものであったが、『セシリア・バルデス』にあって特徴的なことは、恋愛が結婚に結びつかない理由が、キューバ社会の人種構成、社会情勢などに帰結されるということであろう。セシリアとレオナルドが結婚できないのは、二人が異母兄弟であったという理由もある。そして近親相姦(あるいは擬似近親相姦)という要素は、恋愛につきものの、典型的な恋愛の言説ではあるのだが、そもそもセシリアが私生児であるのも、母親がムラータであり、白人の父親とは結婚できなかったからだ(34-5)。ヨーロッパの恋愛小説ならば、階級の差異というのが結婚を阻むものとして大きくたち現れるかもしれないが、ここでは、階級とは人種のことには他ならず、黒人、ムラート(これ

はこれで、その度合いによって細分化される)、白人といった、色の違う人種の織り成す社会の不正を剔抉するため(あるいはその社会を描くため)の装置として、恋愛は要求されているのである。

19世紀キューバ社会はムラートの存在感が増大し、中には社会的な地位の上昇に成功した者たちも少なからずいた。それに対して白人の側からの反動もあり、彼らはスペイン・ルネサンス期以来の「血の純潔」の概念で自らの地位を保とうとした。結果、白人とムラートとの婚姻は厳しく規制され、セシリアのような私生児も増えた。そこから生まれた都市伝説のようなものを下敷きにしたのが、この小説であったのだ(36-48)。

一方で、19世紀キューバは、ムラータを国民表象の一つのプロトタイプとして作り上げる時代でもある。ヴェラ・クツィンスキーは、葉巻のパッケージに描かれた連続ものの版画シリーズなどを分析しながら、そのことを記述している²⁰。ムラータは恋愛の、あるいは欲望の対象として、小説などよりもよりポピュラーな物語の形での悲恋の物語の主人公になってゆくだろう。それが「キューバ」の国民の典型として再生産されてゆくのである。小説『セシリア・バルデス』も、この時代のそのような表象の典型を画しているとクツィンスキーは主張する。たとえば年頃の娘に成長したセシリアが、初めて描かれる次のような場面。

体格は健康体で通用する。画家たちの使う意味での生き生きとした肉感だ。もっとも、少し注意してみたら、すぐに顔の色に気がつくだろう。血色は良いに違いないが、そのつくりにはいささか黄褐色にすぎるところがあり、透き通ってもいなければ解放されてもいけないのだ。では、この少女はどんな人種に属するのか? 言い当てるのは難しい。しかしながら、見る目で見れば、ほんのわずかな暗いいろどりを、彼女の赤い唇は隠しきれていないことがわかる。それに顔色の明るさは、髪の生え際のあたりで終わり、黒ずんでいる。彼女の血は純粹ではなく、三代か四代前にエチオピアの血が混じったことは間違いない。
(73)

「生き生きとした肉感」、「血色は良い」、「赤い唇」、「額の生え際」といった欲望を歓喜するような描写に「黄褐色にすぎる」、「黒ずんでいる」といった観察を交え、彼女がムラータであることを描写していくこの筆致は、欲望の対象と多様な社会の表象が交錯する典型的な19世紀キューバのものと言っていいだろう。『セシリア・バルデス』の中に書き込まれているのは、このような交錯の様なのである。

ところで、既に述べたように、この小説は、初出の短編と完全版とではストーリーが異なる。39年の短編では、恋に落ちた結果姿をくらすのがセシリアであったのに対し、82年の完全版では、レオナルドが命を落とすことになる。恋愛小説にあっては、その恋愛が死をもって報われるというのは鉄則ではあった。だが、これまで私が名を挙げた作品のことごとくがそうであったように、死ぬのは女性である場合が大部分であった。しかし完全版では男性が死んでいるのである。これは見逃せない変更だ。

私はここに、とりあえず、「宿命の女」の導入を読み取りたい。セシリアは相手を翻弄し、魅惑し、その人生を破滅に追いやる（必ずしも死である必要はないが）存在としての「宿命の女」なのだ。マリオ・プラーツによれば、「宿命の女」は十九世紀半ば頃までにヨーロッパ文学に導入されたひとつのプロトタイプである²¹。これが冷淡、不感無覚、人の命を左右するタイプ（シャトーブリアンのヴァレダ、フローベールのサランポーなど）と、エグゾティズムに包まれたタイプ（カルメンやピエール・ルイスによるコンチータ）に分派し、二つの流れを作ってゆく。「相手を惹き寄せ、灼き尽くす炎の役割を果たすのは、十九世紀前半は宿命の男（バイロンの主人公）であり、後半は宿命の女だということである²²」となる。さらに二つの流れのうち一つのタイプがエグゾティズムと繋がることを受け、プラーツは、「エグゾティック（異国趣味）とエロティックの理想とは、連れ立ち伴うものである」と述べている。「このことはまた、同じくらい明白なもうひとつの真実を証明している。すなわち、エグゾティックなものへの愛は、概して性的欲求を理想の領域に投影したものだ、ということである²³」。

私は先に、欲望が国民の表象と交錯するセシリアの記述を見た。しかし、セシリアは「宿命の女」であることによって、エグゾティックの対象でもある。つまり19世紀キューバの国民表象なるものは、きわめて曖昧な、少なくとも「国民」という語が喚起する、身近で自分自身のもので感ぜられる類のものではない、独特の距離感のもとに置かれるものなのである。

「宿命の女」という要素が恋愛という言説の生成・変化の過程で、どの程度の重みを持った変化であったのか（たとえば対立するものであった結婚制度といつしか和解し、ロマンティック・ラヴ・イデオロギーを形成することになる、というような変化に比して）は、ここでは考察する余裕はない。しかし、少なくともそれは変化ではあった。そして、他の19世紀イスマノアメリカの恋愛小説と比して、この変化を取り入れたという点で、『セシリア・バルデス』は新しい。プラーツがエグゾティックなタイプとして挙げたセシリアを生み出したウジェーヌ・シュール、ピリャベルでが読んでいたという

証言(38)などを考慮するに、これは意図的になされた導入であっただろう。しかしこの導入は、人種混交の多様な社会情勢の中で、国民を表象するということにつきまとう困難を露呈するものとなっているのだ。

5 『マリーア』²⁴、あるいはカトリック化の装置

ホルヘ・イサークス(1837-95)『マリーア』は、おそらく、イスペインアメリカ各国で最も読まれた古典的恋愛小説と言ってよいだろう。映画化されたり、学校の読本に取り入れられたりと、それこそたとえば『野菊の墓』のような扱いである。父親の友人の娘として引き取られて育てられた妹同然のマリーアと少年エフラインの恋を描いた小説で、エフラインのロンドン留学中にマリーアが死を遂げるという最後も、典型的といえればあまりに典型的なのだ。

しかし、この小説で私が注目したいのは、そのテクスト性である。ここには、たとえばシャトーブリアンが引用されている。

シャトーブリアンのページは徐々にマリーアの想像力に色をつけていった。非常にキリスト教的で信心深い彼女は、自分が予感したカトリックの信仰の美しさを見出しては喜んでいったものだ。彼女の魂はパレットで、そこに私がそれを彩る見た目も彩な色の数々を出してゆくのだ。詩的情熱 天はそれを持つ男を立派な者とし、にもかかわらずそれを露呈してしまう女を神々しい者にする 　　そういう詩的情熱は彼女の横顔に、それまで私が人の顔に認めたことなどない魅力を与えていた。詩人の思想は、無垢の只中であって人を魅了するあの女に受け入れられると、はるか遠い懐かしいハーモニーの響きとなって私に去来し、再び心を打ち震えさせるのだった(78)。

おそらく、ダンテ『神曲』地獄篇第五歌、フランチェスカのエピソードあたりに始まるのであろうが、二人で読書をするというのも、恋愛小説にはつきもののトピックである。このトピックを踏襲しながら、恋する二人はともに、他ならぬシャトーブリアンを読んでいるというわけである。そしてそのテクストに感情移入し、書かれていることと自分たちの間の出来事を同一視する。二人の読書とは、そういったいわば共感覚を生み出す場である。描写は続く。

ある日の午後、私の国の午後は常にそうであるように、すみれ色の雲と白金の閃光によって美しく、マリーアのように美しく、私にとってのマリーアのように美しくはかなかった、そんな日

の午後、彼女と妹と私は、右手には川が騒がしく音を立てて流れる荒野と、足元には勇壮にして静かな谷を見下ろす坂の、広い石の上に腰掛け、私がアタラのエピソードを読んで聞かせた。二人は驚くほどにうっとりとして身動き一つせず、私の唇から、詩人が「世界を泣かせる」ために紡ぎあげたメランコリックな言葉の一つ一つに聞き入っていた。妹は右腕を私の肩に置き、顔はほとんど私の顔にくっつけ、私が読んでいく一行一行を目で追っていた。私の傍らに半ばひざまずいたマリーアは、既に潤んだその目をそらそうともしなかった。

日も沈んでしまったところに、私は詩の最後のページを読んだ。エマの青白い顔は私の肩で休んでいた。マリーアは両手で顔を覆っていた。これまで何度も私の胸からむせび泣きを引き出した、シャクタスが愛する女の墓に別れを告げる、あの心引き裂かれる場面、「見知らぬ土地に安らかに眠れ、哀れな女よ！愛し、生まれ故郷を離れ、死んでしまったお前は、おかげでシャクタスからさえも見放されるのだ」を読むと、私の声が聞こえなくなったので頭を上げた、マリーアのその顔には大粒の涙が流れているのだった。彼女は詩人の作った言葉ほどに美しかったし、私は詩人が流したような愛でもって彼女を愛していた。私たちは黙し、ゆっくりと家へと向かった。ああ！私の魂とマリーアの魂は、あの本を読んだからというだけで感動していたのではない。同時にある予感に打ちのめされていたのだ(78-9)。

風景が「私の国」の風景としてこのシーンに描かれているという点に留意しておくべきだろう。恋愛は、風景を伴って内面を形作ってゆくものであるというここでの論点が確認されるからだ。しかし、それはともかく、ここに、シャトーブリアンのものと明示された引用が存在することに今は注目したい。ちなみに、「世界を泣かせる」という語は、ベルナルダン・ド・サン＝ピエールのものである。おそらくはイサークスの勘違いであろうが、このことはサン＝ピエールやシャトーブリアンが参照系として重要なものであったということを示しているだろう。

続く引用は、実際、シャトーブリアンからの一字一句違わぬ引用となっている。しかし、同時に嘘がある。ここに引用されているのは、最後のページではない。実際の『アタラ』には、この後、数ページのエピローグが挿入されるのだ。シャクタスがアタラの墓に別れを告げ、確かに二人の恋愛の話は終わる。だが、『アタラ』はもともと、『ルネ』(1802)における主人公ルネが、アメリカに渡り、そこで出会った老人シャクタスから、若き日の思い出としてアタラの話の聞くという構成であった。エピローグでは、ルネがその話を語

り伝え、それを聞いたシャトーブリアンがそれを本にする決意を語るのである。その部分でシャトーブリアンは「そしてまた〔わたしは〕、キリスト教がもっとも激しやすい感情である恋愛ともっとも恐ろしい恐怖である死とに対して勝利をかちうるさまをも認めたのである²⁵」として、この恋愛の物語にキリスト教の勝利という価値付けを行っているのである。

恋愛は宗教(結婚制度)と対立するものとして始まった。しかし、それはいつしか宗教と和解するだろう。ロマンティックな恋愛が結婚に直結するのだという考えが、やがて私たちの意識に蔓延するようになり、いまだに力を持っている。これがいつ頃始まる現象なのかは定かではないが、少なくとも『アタラ』の中には、宗教と恋愛を和解させよう、あるいは宗教によって恋愛を手なづけようとする意図が確認できる。たとえば、シャクタスとアタラが逃避行を続け、ある日、済んでのところで関係を持とうとする(情熱恋愛の掟に反して)瞬間の記述である。

わたしたちの不幸とすばらしい恋愛とにふさわしかった壮麗な婚礼の儀式よ、つる草や丸い枝々の茂みをまぐわいの床のとばりと天蓋のようにゆり動かしたみごとな森よ、ふたりの婚姻のたいまつ役をつとめて燃えた松よ、岸をあふれて流れてた河よ、鳴動した山山よ、恐ろしくもまた荘厳な自然よ、おまえたちはただ、わたしたちをあざむくために準備された仕組みでしかなかったのか!〔略〕

アタラはもうほんのわずかな抵抗しかなかった。わたしはもうすこしで幸福の時に達しようとした。そのときとつぜん、ひき裂くような雷鳴をともなったはげしいいなづまが、濃い闇をつらぬいて走り、〔略〕まもなく、あたりがしずまると鐘の音が聞こえてきたのだ!²⁶

恋愛の、あるいは肉体関係を持つという行為に際し、周囲の自然を婚礼のベッドに譬えるというこのレトリックは、自然と内面とが通底するものであり、それゆえ人間は自然を征服できるのだとする近代的な関係意識を強化するものであるだろう。と同時に、恋愛が婚礼に行き着きうるものだとする展開を作ってもいるように見える。そのためか、静まり返った後の鐘の音が、現代ではおなじみの、通俗的なロマンスにつきものの、恋愛の成就としての結婚を知らせる鐘の音にも聞こえるだろう。

恋愛と風景のみならず、恋愛と宗教とのこのような関係を描いて、最後に上のようなコメントを付すのであるから、『アタラ』はきわめて宗教的な意図に貫かれた書であるというほかはない。そもそもシ

シャトーブリアンは信仰の徒であったし、『アタラ』は『ルネ』同様、主著『キリスト教精髓』の一部をなすものであった。

こういった『アタラ』の属性を考えると、先に引用し、一旦は見過ごしかけた一節が、重要なものとして浮かび上がってくるだろう。シャトーブリアンを読むマリーアを描写して、「非常にキリスト教的で信心深い彼女は、自分が予感したカトリックの信仰の美しさを見出しては喜んでいたものだ」とした、あの一節である。つまりマリーアはシャトーブリアンのテクストに、恋人たちの恋愛の成り行きのみを読んで感情移入していたのではない。そこにあるキリスト教の属性にも感情移入し、感動していたのだ。

エフラインの父親とマリーアの父親は友人であった。そんな関係で、妻を亡くした後者はマリーアを前者に預けた。この経緯は比較的早い段階で語られる。エフラインとマリーアの恋愛の物語として小説を読み継いでいくと、それは些細な前史として忘れられがちではあるのだが、そこには二人の父親がともにユダヤ人であったことも書かれている。スペイン人と結婚したエフラインの父は、妻の求めに従い、カトリックに改宗した。一方、ジャマイカ人を妻としたマリーアの父は改宗できなかった。それで、マリーアを友に託すに際して、彼女を改宗させることに同意していたのだ。あまつさえ、エステルというユダヤ人的な名前をマリーアというキリスト教の聖母の名に変えるよう提案さえしているのだ(65-7)。つまり『マリーア』は、ひとりの少女のカトリック化、キリスト教化の物語でもあるのだ。

キリスト教化の物語である『マリーア』の中で、シャトーブリアンの『アタラ』はこのように中心的に機能する装置である。マリーアは彼のテクストの中に恋愛とキリスト教の美しさを見出し、その二つに恋をするのだった。『マリーア』の中には使用人や奴隷のカップルの結婚式が描かれるのだが、これも恋愛と宗教との両方にかかわってくる儀式であるならば、小説の二重の意図はいまや明らかだろう。前に名を挙げたドリス・ソマーは19世紀ラテンアメリカの小説やロマンスが、恋愛と結婚との齟齬を描く(つまり、典型的な情熱恋愛の小説)ことの多い同時代のヨーロッパの恋愛小説に比して、家族の概念を強化する傾向にあると分析しているが²⁷、そんな流れの中に『マリーア』をおいて見るならば、この小説こそが情熱恋愛と宗教との和解、というよりも宗教による恋愛の取り込みを刻印した小説と言いたくなる。もちろん、家族の概念の強化、宗教の一元化という問題は、深くナショナリズムの概念にかかわってくるものでもある。

6 出口なし：結論、もしくは課題

上に分析した二つの19世紀恋愛小説は、あるいは恋愛の言説における新しい形を取り込みながら、あるいは具体的なテキストを取り込みながらも、ヨーロッパの恋愛小説が生み出してきた二つの欲望をそのままなぞっている。すなわち、エグゾティックなものにエロティックなものを投影しようという欲望と、宗教と恋愛との和解という欲望である。さらに、その際に宗教がキリスト教、カトリックであり、対象がアメリカ大陸である限りにおいて、これはその地の植民地化推進の欲望にも重なってくる。前出の林みどりは(旧)植民地の人々がヨーロッパによる植民地の表象を取り込む(自己領有する)に際して起きる問題のひとつに、他ならぬ植民地支配者側の欲望そのものをも自己領有することになってしまうという現象を指摘しているが、ここにもそのもう一つの事例を見出したというべきなのだろうか? 『セシリア・バルデス』における国民表象=自己表象であるはずのムラータの表象は、結局のところ、ヨーロッパが外部世界に向けたまなざしの繰り返しでしかないのか?

ところでヨーロッパの恋愛小説が外部を求めたのは、そこにエロティックな欲望の対象を求めたばかりではなかった。反社会的である恋愛にとって、恋する者たちの避難所が必要であったから外部を求めたのだった。この点に関してはどうか? イスパノアメリカ発の恋愛小説に外部はあるか?

『セシリア・バルデス』の場合、それは、ない。完全版は作者のニュー・ヨーク滞在中に書かれたにもかかわらず、テキスト中に国外はほとんど出てこない。わずかにレオナルドの父が行っていた奴隷貿易の船がイギリスの艦隊に拿捕されたという記述と、奴隷黒人が自らの生い立ちを主人公たちに語って聞かせる思い出話が挿入されるのみである。

一方、『マリーア』では、イギリスが重要な要素になりはする。家業を継ぐべく勉学を修めねばならないエフラインは、イギリスに留学する。その間にマリーアの容態が急変し、死んでしまうのだった。ところが、全70章からなら小説中、一年を占めるはずのエフラインのロンドン滞在は、わずか2章弱の分量のみで語られるし、その2章すらも、イギリス到着後の時間経過を示すのみで、後はマリーアからの手紙に当てられるといった具合で、実質的にイギリスの記述は存在しない。それは、マリーアを殺すための口実にしかなくなってないのだ。これでは外部が描かれているとはいいがたい。

かつて被植民者であった者たちが、恋愛という言説を取り込み、そのとき同時にかつての植民者の欲望までも身にまとってしまうのなら、植民地の内側にもうひとつの植民地が出来上がってしまうというネオ・コロニアル状況を確認するだけで、出口なしの閉塞状況に陥るだけだろう。この状況から抜け出るには、おそらく、20世

紀の恋愛小説を分析する必要がある。20世紀の作家たちの作品には、恋愛の言説を自覚的に取り込みながら、その関節を外してしまおうとする意図が見えなくもない。だが、それはまた論を改める必要があるだろう。

¹ Edward W. Said, *Orientalism* (New York, Pantheon, 1978) (『オリエンタリズム』上下、板垣・杉田監修、今沢紀子訳〔平凡社ライブラリー、1993〕)

² Said, *Culture and Imperialism* (London, Vintage, 1993) (『文化と帝国主義』1・2、大橋洋一訳〔みすず書房、1998、2001〕)

³ Mary Louise Pratt, *Imperial Eyes: Travel Writing and Transculturation* (London & New York, Routledge, 1992)

⁴ 林みどり『接触と領有 ラテンアメリカにおける言説の政治』(未来社、2001)

⁵ 柳原孝敦「アルフォンソ・レイエスのアメリカ論」『ラテンアメリカ研究年報』No.14(1994)、117-143ページ。

⁶ 「ラテンアメリカ主義のレトリック」と題するシリーズでいくつかの論文を發表している。これらは、博士論文としてまとめる予定ではあるが、既發表のものとして、「とまどう放蕩息子 消費、モダニズムのモラル、ラテンアメリカ主義」『法政大学多摩論集』第十七巻第一号(2001)、29-52ページ、など。

⁷ 柳原、「為政する抵抗者 ロドー『アリエル』の二重性」本橋哲也編『歴史の中のテンペスト』(人文書院、近刊予定)所収、など。

⁸ 柳原、「交錯するディスクール/表象する隠喩 アレホ・カルペンティエルと自己成型の問題」『ラテンアメリカ研究年報』No.16(1996)97-125ページ、など。

⁹ ドニ・ド・ルージュモン『愛について エロスとアガペ』上下、鈴木・川村訳(平凡社ライブラリー、1993)

¹⁰ スタンダール『恋愛論』上、前川堅市訳(岩波文庫、1993)、39ページ。

¹¹ 同上、51ページ。

¹² ベルナルダン・ド・サン=ピエール『ポールとヴィルジニー』木村太郎訳(岩波文庫、1941)、3ページ。ただし、漢字、かな使いを変更。

¹³ 柄谷行人『日本近代文学の起源』(講談社文芸文庫、1988)第一章

¹⁴ サン=ピエール、前掲書、前傾箇所。

¹⁵ そのことに多くの紙数を割いているのが、Pratt, *op. cit.* である。

¹⁶ Pedro Enriquez Ureña, *Seis ensayos en busca de nuestra expresión, Obra crítica* (México, Fondo de Cultura Económica, 1960), p. 246.

¹⁷ Doris Sommer, *Foundational Fictions: The National Romances of Latin America* (Berkeley, U. C. Press, 1991)

¹⁸ 少し時代が下って、むしろ19世紀末ではあるけれども、ジャーナリズムや小説における風俗写生がいかにかポピュラー・ナショナリズムにかかわってくるかに関して、メキシコの事例を論じて参考になるものに、Ricardo Pérez Monfort, *Estampas de nacionalismo popular mexicano: Ensayos sobre cultura popular y nacionalismo* (México, CIEZAS, 1994) がある。

¹⁹ Cirilo Villaverde, *Cecilia Valdés o La Loma del Ángel*, Ed. de Jean Lamore (Madrid, Cátedra, 2000) を使用する。引用は本文中()にページ数を示す。また、版による異動などに関しては、当該版のLamoreによる注や前書きなどに基づく。

²⁰ Vera M. Kutzinski, *Sugar's Secret: Race and the Erotic of Cuban*

Nationalism (Charlottesville and London, U. P. of Virginia, 1993).

^{2 1} マリオ・プラーツ『肉体と死と悪魔　ロマンティック・アゴニー』
倉智、草野、土田、南條訳（国書刊行会、1986）247　386 ページ。

^{2 2} 同上、270 ページ。

^{2 3} 同上、258 ページ。また、工藤庸子『フランス恋愛小説論』（岩波新書、1998）103　120 ページは、メリメの『カルメン』を分析しながら、やはりそこにエグゾティックとエロティックの関係を分析している。さらにはそれと文献学との関係に論及しているのだが。

^{2 4} Jorge Isaacs, *María*, Ed. de Donald McGrady (México, REI/Cátedra, 1988). 引用や二次情報に関しては『セシリア・バルデス』と同様に扱う。

^{2 5} フランソワ・ルネ・ド・シャトーブリアン『アタラ』辻昶訳『世界文学大系 25 シャトーブリアン　ヴィニー　ユゴー』（筑摩書房、1961）、44 ページ上段。

^{2 6} 同上、25 ページ上段　26 ページ下段

^{2 7} Sommer, *op. cit.*